様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２３ 日現在

機関番号：２８００３
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１８６１１

研究課題名（和文）沖縄の地域文化に根ざした自死遺族支援の構築―相互扶助の中で忌避される自死―

研究課題名（英文）A Study on Support for Suicide Survivors Rooted in Local Culture in Okinawa: Suicide Avoided in Mutual Aid

研究代表者
鈴木　啓子（Suzuki, Keiko）

名桜大学・健康科学部・教授

研究者番号：６０２２４５７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は沖縄の地域文化に根差した遺族支援の構築を目指している。親密なコミュニティ(沖縄的共同性)の中で自死をはじめ忌避される問題が起こった場合、語らない、知っていても話題にしない気遣いゆえに、日常的関係性において相互扶助を確認できなかった。その一方で、当事者の個人的問題は本人不在の中で、地域住民により噂話として共有されている実態が明らかになった。こうした地域の特徴を配慮した情報収集とその確認、また、当事者に脅威を与えない慎重な関与と継続的な見守りとしての支援の工夫が明らかになった。また遺族支援として参加する遺族自身の匿名性を確保できる情報提供、およびユタらシャーマンの活用可能性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　沖縄的共同性の中で、自死を知られてしまう強い不安を遺族が持っており、その背景には地域住民間で共有されている自死への忌避感情が強く反映していることが示唆された。その一方で、ユタらが祖霊との関係の中で自死者の尊厳を守る視点から死を意味づけ、現実的に遺族の安寧に寄与している実態を明らかにした。遺族も含め孤立している住民への支援において、各家庭の個人情報が驚くほど共有されている地域特性を踏まえた支援のあり方、また匿名性を確保した上での自死遺族への情報提供のあり方を提案した。自死遺族は沖縄的共同性による支援を受けていないこと、むしろその中で孤立、苦悩している現状を踏まえた支援の必要性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：　This study aims to build a support system for bereaved families that is rooted in the local culture of Okinawa. When suicide and other avoidable problems occurred in a close community (Okinawan communality), mutual support could not be confirmed in everyday relationships because people were careful not to talk about it, or not to discuss it even if they knew about it. On the other hand, it became clear that personal problems were shared as gossip by local residents in the absence of the person concerned. The study highlighted the need to gather and validate information that takes into account the characteristics of the local area, and to develop ways of providing careful involvement and ongoing monitoring support that does not pose a threat to those affected. The study also showed the possibility of providing information to ensure the anonymity of the bereaved themselves and the use of Utah and other shamans to support the bereaved.

研究分野：精神保健看護

キーワード：自死遺族支援　地域文化　相互扶助　沖縄　自殺　ユタ　地域包括ケア　死者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

沖縄では現在でも“ゆいまーる”といわれる相互扶助文化が地域コミュニティにおける人々の暮らしの中で機能している。しかし、この相互扶助文化において自殺は“異常な死”として忌避され、遺族は相互扶助の対象とならずに厳しい孤立と苦悩の中におかれることを研究者らは明らかにした(Shinzato,Suzuki;2017) 。心理学的剖検データベースを活用した自殺の原因分析(心の健康科学研究事業,2007)では「最終的には地域文化コミュニティの親密さが遺族を癒す」と述べられているが、研究者らが沖縄県で初めて実施した自死遺族の調査からは、地域コミュニティの親密さにより遺族は癒されるどころか、日々の生活の中で機能している相互扶助そのものから疎外され、長年にわたり苦悩を体験していた。結果的に、相互扶助の親密な関係の中で深刻な孤立や悲嘆を経験していることが明らかになった(新里,鈴木;2016)。

「地域住民の生活や文化」を考慮しない自死遺族支援の有効性への疑問が指摘されている(川野,2009)。相互扶助のような社会資源が自死遺族支援にどのように影響するかに関する調査研究は全国的にも限られており、沖縄県では着手されていない。そこで、本研究では沖縄の相互扶助文化の中で、“異常な死”として忌避される身内の自殺に直面した遺族、地域で生活する自死遺族でない一般市民、沖縄県内の葬儀社、専門家らへの面接調査により、支援が効果的に進展しない状況の背景を分析し、その結果を踏まえ沖縄の地域文化に根ざした自死遺族支援方法を構築することを目的としている。

２．研究の目的

本研究は、相互扶助文化の根強い沖縄において自死遺族支援が進まない背景を分析し、沖縄の地域文化に根ざした自死遺族支援方法を探求することである。自死遺族支援が広がらない背景には、従来沖縄のソーシャルキャピタルとして積極的に評価されてきた相互扶助の伝統的地域文化がかかわっている可能性が示唆されたため、地域文化を反映した自死遺族支援方法を構築を目指すものである。

３．研究の方法

(1) 沖縄県における葬送儀礼の現状および自死遺族支援の現状について資料収集およびフィールドワークの実施

沖縄県北部地域 3 か所および島嶼 1 か所の葬送儀礼に関するフィールドワークを実施し、共同墓及び門中墓での納骨の状況について調査を行った。区長らへの聞き取りも行いながら、実際に墓地の納骨の状況を確認した。

(2)自死遺族への面接調査の実施

沖縄県北部地区 1 名、中部地区 1 名、南部地区 1 名、島嶼 2 か所各 1 名の計 5 名に身内を自死で亡くした体験について半構造的面接調査を実施した。面接調査内容は録音し逐語録におこし、質的記述的に分析した。協力者のうち 2 名は、沖縄県内で行われている当事者会(自死遺族支援活動)を立ち上げ、運営してきた経験があったため、これについても、発足から実施運営の状況と課題について聞き取りを行い、質的に検討した。

(3)地域に詳しい一般住民への面接調査の実施

地域の行事や祭祀にも詳しい一般住民 12 名(区長、書記、元民生委員、元会社員、元大工、主婦など)の協力を得て、地域での自死者および自死遺族とのかかわり、自死の事例の葬儀やその後の地域での対応などについて面接調査を実施した。

(4)自死遺族支援にかかわる専門職への面接調査の実施

自死遺族支援に直接かかわる臨床心理士 1 名、精神保健福祉士 1 名、精神保健指定医師 1 名、行政職員 1 名を対象に自死遺族支援および課題について面接調査を実施した。

(5)ユタおよび神女、ノロへの面接調査の実施

沖縄県では死者および遺族のスピリチュアルケアを担うシャーマンなどの存在が現在も人々に活用されている。このため、沖縄県北部地区で活動をしているユタ、神女、ノロに自死遺族からの相談、死者への対応、自死後の魂の在り方などについて面接調査を実施した。

(6)自死が発生した際に自死遺族に直接かかわる専門職への面接調査の実施

自死が発生した場合に、自死遺族に直接関与することになる元警察官 2 名、葬儀社 3 名、遺体管理師 1 名、僧侶 4 名に、自死遺族の状況や自死遺族への支援の可能性について面接調査を実施した。

(7)地域および行政において直接住民の支援にかかわる地域包括支援センターなどの職員、民生委員、区長らへの面接調査の実施

地域で実際に精神的健康問題を介護問題、貧困などを抱えているが孤立している住民を対象に実際にどのような日常的な対応や緊急時の介入をしているのかなど、必ずしも自死だけに限定せずに、地域における支援の現状と課題に焦点を当て面接調査を実施した。協力者は 3 つの地域包括支援センターの職員延べ 7 名、区長ら 4 名、民生委員 5 名である。

面接調査結果については質的記述的に分析した。倫理的配慮については研究者所属大学における倫理審査委員会の承認を得てから実施した。事前に研究協力者に対して研究目的・方法・質問内容、プライバシーの保護、研究協力は自由意思によるものであり、話したくないことは話さなくてよいこと、辞退も可能であることなどを文書および口頭で説明し同意を得た。

４．研究成果
(1)葬送儀礼の現状および行政による自死遺族支援の現状について
①地域における葬送儀礼および墓の状況について
4市町村8地区でフィールド調査および聞き取りを実施した結果、各地区には共同墓(村の墓)、門中墓、個人の墓などが存在し、一般葬儀の手続きについては明確であった。一方、自死による葬儀の方法については、ここ最近経験がないことや自死遺族自ら公にすることを望まないため、区長らも情報をもっていなかった。また、昨今のコロナ禍の影響もあり、一般葬儀そのものの簡素化も急激に進んでいることから、表向きには自死による簡素化と病死や老衰などによる葬儀の簡素化が同時に起こっていることが確認された。一方で、自死への一般的な感情として、「悪いこと(自死)をした人は部落に入れない」「自殺で亡くなったときには(葬儀を)内緒で家族だけでやるものだ」「門中に迷惑をかける」「先祖様の名を汚す」「いのちを粗末にすると、バチカンジモン(罰当たり者)だ」「自殺はひた隠しにする」「自殺が起こるのは血筋だ」等の語りがあり、自死に伴う葬儀および仏事は把握しておらず自死が忌避される傾向が確認された。
②専門職の語る自死遺族支援について
行政が主催している自死遺族支援の会で自死遺族にかかわる臨床心理士および精神保健福祉士、担当者は専門職が主催しているが、いずれは自死遺族自身によるセルフヘルプグループとして発展していくことを期待していた。参加者数の少なさおよび県民の認知の促進は課題としてあることが確認できた。
(2)自死遺族当事者の経験の語りと自助グループの現状と課題
①自死遺族の経験
自死遺族への面接調査結果からは親族による先祖の墓への納骨拒否、次の自死者を防ぐための模擬葬儀の実施、遺骨を本墓(先祖の墓)と別に仮墓に納骨、周囲の人々の葬儀への不参加などにより自死への忌避や恥をさらに強く意識する経験をしていた。自死後の二次的な傷つきが遺族の生活上の問題や心身の不調全般にかかわる援助希求を困難とし問題解決を遅らせる実態が明らかになった。自死遺族支援については、従来、遺族の語りを受けとめ、精神的苦痛を軽減することが求められるが、親密なコミュニティにおいて自死が忌避される明確な状況があり、そうした中で自身や身内のことを語らない、語ることができない課題があることが明らかになった。
②自死遺族支援自助グループの立ち上げの経験
協力者のうち2名(A氏・B氏)は、こうした自身の苦悩の経験から他自死遺族のために県内で自助グループを立ち上げていた。A氏は13年間に39回開催するが参加者は1名のみであり5年前に活動停止している。B氏は現在まで10年間活動を継続しているが参加者は0－2名程度で、参加者数の少なさが課題となっていた。遺族は、自死遺族会運営に当たっては［自治体によらない当事者主体の場づくりと関与］を理想としていたが、［思うようにならない参加者数と力不足を実感］し、沖縄県での自死遺族会への参加者の少ない現状を［守秘への不安による参加者の足踏み］があり、［当事者(遺族)任せにしない自治体の積極的関与］を望んでいる実態が明らかになった。
(3)ユタおよび神女、ノロへの面接調査を通して確認できた自死遺族の現状と支援の可能性
沖縄では「医者半分、ユタ半分」といった民間信仰による癒しは現在でも息づいている。地域の伝統文化を担う神女、ノロそしてあの世とこの世を結ぶユタを対象として、自死遺族への関わり、自死への認識などについて面接調査を実施した。神女およびユタは自死遺族にかかわることがあり、特にユタは数十件の相談経験があり、その8割は1度の相談で安寧を取り戻し終了となるということで、地域の中で自死遺族が支えられている実態が明らかになった。「自死の理由」、「自死の苦悩」、「成仏できているのか」などのスピリチュアルな悩みについて、死者との対話が可能なユタが、死者の声を遺族へ伝えることで解決されていた。神女・ユタ共にすべての死者の魂は尊厳のある供養が重要であり、死者の存在を感じ生活することが遺族の安寧にもつながることが明らかになった。地域住民の中にある自死への忌避とは対極的な「自死者の尊厳」を守ることで「生者も守られる」神女およびユタの機能が明らかになった。
(4)自死遺族に直接かかわる専門職(警察官、僧侶、遺体管理師、葬儀社)への面接調査を通して確認できた自死遺族の現状と支援の可能性
自死遺族に何らかの形で直接かかわることになる職種として初めに警察官が当たる。遺体との対面や遺体の対処などについての語りが多かったが、遺族への関わりについては、語りが少なかった。僧侶(浄土宗2名、臨済宗2名)は、疑問はあるものの土着のシャーマンであるユタとの連携を図りつつ、遺族の心理的負担に配慮したかかわりをしていた。遺族から求められないので僧侶から関与することはないことが確認された。一方で、遺体管理師、葬儀社社員は自死を把握でき、かつ遺族の求める簡素で速やかな手続きができるように対応していた。死因がわかる立場にあるからこそ情報提供などの自死遺族支援が可能であり、貢献したい意向があることが確認できた。葬儀社の社員への聞き取りから、自死に限らず葬送儀礼をめぐる公的私的行事が沖縄県でも極端に簡素化する傾向がみられており、表面的には第三者にはわかりにくくなっている現状が伺えた。
(5)地域および行政において直接住民の支援にかかわる民生委員・地域包括支援センター職員・区長らへの面接調査を通して確認できた孤立住民の現状と支援の可能性
民生委員らはゲートキーパーとして研修は受けているものの、地域における自死関連の情報共有ができない現状に不全感を抱えていた。相談業務担当者から、若年妊娠や虐待、DV などを

扱っている中で、相互扶助のある親密なコミュニティでは支え合いがあると思われがちであるが、実際には問題が生じた場合に排除が起こり、当事者は支持を受けることが困難になる事例が多数あることが確認された。これは岸・上間・打越ら(2020)社会学者の指摘と重なる。

一方、各地域の中で実際に生活上の問題や精神的健康問題を抱え、孤立している住民に継続的にかかわる地域包括支援センター職員らからは、自死などの忌避される問題が起こった場合、語らない、知っていても話題にしない気遣いゆえに日常的な関係性の中での相互扶助を確認できないため、注意深い接触と時間をかけた関係づくりが行われていた。孤立している本人抜きにその情報は噂話として、住民の中ではほぼ共有されており、支援センター職員らは耳にした気になる情報を区長らに確認するなどその客観性を担保しつつ、実際に定期的に訪問し声をかけることを意識的に行っていた。訪問への拒否、攻撃などにはさりげない対応によりかわしつつ、関係づくりをしていた。相互に見知っているコミュニティのもつ特性を生かした問題把握と関係づくりが支援として行われていることを確認した。

(6)沖縄県における地域文化に根差した自死遺族支援についての検討と取り組み

親密なコミュニティがある中で、自死遺族が苦悩を他者に打ち明けたり相談することの困難が本研究を通して明らかになった。一般住民の自死への忌避感情や従来より行われている自死後の葬儀、墓をめぐる慣習などは、身内を自死で亡くし遺族が体験する「共同体からの深刻な疎外」といえる。須田(2022)が居住地域における相談の困難を指摘しているが、沖縄では親密なコミュニティを超えて県の広がりの中でも、なお自身の抱えている問題が知られてしまう不安を自死遺族が持っていた。この背景には自死への忌避感情の強さが反映しているものと考えられる。現在、沖縄県では自死遺族向けの「わかちあいの会」(県主催１か所)が開催され、また自助グループ(遺族主催 1 か所)も定期的に開催されているが参加者が少ない。自死遺族であることを知られる不安や共同体からの排除への恐怖が起こるためと考えられる。遺族は支援を拒んでいるのではなく、既存の支援の枠組みが遺族に安心感をもたらさないものと考えられる。このため、参加者の匿名性が確保されるような多人数が集う一般市民向けの「講演会や県外からの自死遺族との交流会」を定期的に開催するなどが遺族の不安を軽減し、同じ経験をもつ人々との対話を可能にすると考えられる。シンポジウムや講話形式の終了後に相談ニーズのある当事者(遺族)が個別相談や自助グループにつながることが可能となるような段階を踏んだ支援の場の提供の必要性が示唆された。

自死遺族の多くは死者の魂が成仏しているのか、死後の安寧を非常に気にかけている。死への思いや宗教観、シャーマンへのニーズ等は、各々の遺族の状況により異なる。遺族の希望があった場合には、これらの活用の可能性と意味について第三者的立場からの助言と共に情報提供ができるものと考える。特に本研究においてユタ、神女共にすべての死者の尊厳は守られるべきであり、自死は忌避されるべきものではないと明言していることは、一般住民における自死への忌避感情とは対極をなすものであった。自死遺族とイタコの対話について検討した吉野(2013)は、シャーマンと自由に話せる距離を保ち開放的に話せることの重要性にふれている。沖縄県北部地域における自死遺族のスピリチュアルケアとして神女やユタの存在は、遺族の悲嘆を緩和する上で重要な機能を果たしていた。われわれ医療保健の専門家は、これらの土着の文化に根ざした癒しの機能を理解した上で、自由にその活用について検討することも有益であると考える。例えば、既述した一般市民向けの講演会などの場で、ユタや神女など土着の先祖崇拝の視点から自死の意味や自死後の死者について遺族ができることについて講話を聴くということも、一つの自死をめぐる忌避感情や遺族の自死へのネガティブな認識を緩和し、新たな認識を得る心理教育的な支援にもなりえる可能性があるものと考える(鈴木他,2021)。

問題を抱える孤立状態にある住民の支援にかかわる民生委員・地域包括支援センター職員・区長らへの調査より、自死をはじめ忌避される問題が起こった場合、話題にしない気遣いゆえに相互扶助を確認できなかった。しかし、当事者の個人的問題は本人不在の中で、地域住民により十分共有されていることから、この地域の特性に配慮した情報収集とその確認、また、当事者に脅威を与えない慎重な関与と継続的な見守りの必要性が明らかになった。本研究成果については、沖縄における地域文化に根差した自死遺族支援に役立てていく予定である。

文献

加我牧子,他(2009)心理学的剖検データベースを活用した自殺の原因分析に関する研究,https://mhlw-grants.niph.go.jp/project/14329,2023.6.16 閲覧
川野健治,伊藤弘人.(2009). 未遂者・遺族等へのケアに関する研究,自殺予防と危機介入,28,22－27.
須田木綿子(2022).９個人化の時代の包摂ロジック,宮本太郎編『自助社会を終わらせる』岩波書店,276.
岸政彦・打越正行・上原健太郎・上間陽子(2020).地元を生きる　沖縄的協働性の社会学,ナカニシヤ書店.
Shinzato,M.,Suzuki,K.(2017)Suicide surviving families’experiences against the background of Okinawan culture, TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017(Bangkok, Thailand)
鈴木啓子,鬼頭和子,村上満子(2022)ユタの語る自死遺族および自死者とのかかわり―沖縄の地

域文化を踏まえた自死遺族支援についての一考察―,環太平洋地域文化研究,3,109-122
吉野淳一(2013)第 4 章この世とあの世をつなぐ者(シャーマンの教え),『自死遺族の癒しとナラティブ・アプローチ―再開までの対話努力の記録―』,共同文化,235-236

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 鈴木啓子,鬼頭和子,村上満子	４．巻 第7巻
２．論文標題 沖縄県北部地域における自死および自死遺族をめぐるユタ・ノロ・神女の語りの検討 ―地域文化に根ざした遺族支援とは―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 祈りと救いの臨床	６．最初と最後の頁 ー-ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木啓子,鬼頭和子,村上満子	４．巻 7
２．論文標題 沖縄県北部地域における自死および自死遺族をめぐるユタ・ノロ・神女の語りの検討 ―地域文化に根ざした遺族支援とは―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 祈りと救いの臨床	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木啓子,鬼頭和子,村上満子	４．巻 3
２．論文標題 ユタの語る自死遺族および自死者とのかかわり―沖縄の地域文化をふまえた自死遺族支援についての一考察ー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 環太平洋地域文化研究所紀要	６．最初と最後の頁 109-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鈴木啓子	４．巻 48巻2号
２．論文標題 ユタによる自死および自死遺族をめぐる支援の可能性ー死者との対話による癒しー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 精神療法	６．最初と最後の頁 70-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 新里美智子， 鈴木啓子	4．巻 28
2．論文標題 「ゆいまーる」文化の根強い沖縄における自死遺族の体験と求める支援 ： 自死遺族支援が進まない背景の分析と効果的な支援の検討	5．発行年 2020年
3．雑誌名 豊かな高齢社会の探究 調査研究報告書	6．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計18件（うち招待講演　0件／うち国際学会　10件）

1．発表者名 鈴木啓子,鬼頭和子,村上満子
2．発表標題 沖縄県北部地域における自死および自死遺族をめぐるユタ・ノロ・神女の語りの検討 ―地域文化に根ざした遺族支援とは―
3．学会等名 第7回日本「祈りと救いとこころ」学会学術集会
4．発表年 2022年

1．発表者名 Keiko Suzuki, Mitsuko Murakami, Kazuko Kito
2．発表標題 Actual Conditions and Issues of Civil Welfare Workers as Gatekeepers for Suicide Prevention in the Community
3．学会等名 TNMC&WANS International Nursing Research Conference 2022(Tiwan)（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Hayato Kato, Keiko Suzuki
2．発表標題 Support Respecting the Wishes of Relatives of Individuals With Mental Illness in Japan: Support for Relatives Who Do Not Wish to be Involved With the Individuals
3．学会等名 TNMC&WANS International Nursing Research Conference 2022(Tiwan)（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 村上満子
２．発表標題 村落共同体の基盤にあるもの～A村字(あざ)誌の分析から
３．学会等名 第32回日本精神保健看護学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 村上満子
２．発表標題 広域行政圏の２つの精神科病院での地域移行の 取り組みー「制度」からみた地域連携,
３．学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Keiko Suzuki Mitsuko Murakami Kazuko Kito
２．発表標題 Actual Conditions and Issues of Civil Welfare Workers as Gatekeepers for Suicide Prevention in the Community
３．学会等名 TNMC&WANS International Nursing Research Conference 2022(Tiwan)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 鈴木啓子,新里美智子,鬼頭和子,村上満子
２．発表標題 ゲートキーパーとしての民生委員の認識する自殺予防の現状と課題
３．学会等名 第45回日本自殺予防学会学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 新里美智子,鈴木啓子,鬼頭和子,村上満子
２．発表標題 僧侶および葬儀社への面接調査からみえる沖縄における自死遺族支援の可能性
３．学会等名 第45回日本自殺予防学会学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Michiko Shinzato, Keiko Suzuki, Kazuko Kito
２．発表標題 A study on how nurses can work with monks in supporting suicide survivors. - through interviews with monks in communities where suicide is held in abhorrence -
３．学会等名 ICN congress2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Keiko Suzuki, Michiko Shinzato, Kazuko Kito
２．発表標題 Inquiry into support for suicide surviving families in regions with aversion to suicide： through interviews with employees of funeral companies, an embalmer and police officers
３．学会等名 ICN congress2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Keiko Suzuki, Michiko Shinzato, Kazuko Kito
２．発表標題 Inquiry into support for suicide surviving families in regions with aversion to suicide： through interviews with employees of funeral companies, an embalmer and police officers
３．学会等名 ICN Congress2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Michiko Shinzato, Keiko Suzuki, Kazuko Kito
２．発表標題 A study on how nurses can work with monks in supporting suicide survivors. - through interviews with monks in communities where suicide is held in abhorrence -
３．学会等名 ICN Congress2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Keiko Suzuki, Michiko Shinzato, Kazuko Kito
２．発表標題 Inquiry into the situation of suicide surviving families and their support in regions with a deep-rooted spirit of mutual aid ： aversion to suicide as abnormal death in communities
３．学会等名 ICN congress2019 (Singapore)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 新里美智子、鈴木啓子
２．発表標題 沖縄県における自死遺族グループの運営支援ー遺族会を立ち上げたスタッフの体験と求める支援ー
３．学会等名 第43回日本自殺予防学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 鈴木啓子、新里美智子、鬼頭和子
２．発表標題 沖縄におけるユタおよび神女の語る自死と供養ー相互扶助文化における自死をめぐる忌避の検討ー
３．学会等名 第43回日本自殺予防学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Michiko Shinzato, Keiko Suzuki,Kazuko Kito
２．発表標題 Community Members’ Experiences of Suicide against the background of Okinawan culture －Avoidance and support surrounding suicide in a mutual assistance culture－
３．学会等名 TNMC&WANS International Nursing Research Conference 2019(Osaka)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Keiko Suzuki, Michiko Shinzato, Kazuko Kito
２．発表標題 Sherman(YUTA)’s function in support of the suicide surviving families in Okinawa
３．学会等名 TNMC&WANS International Nursing Research Conference 2019(Osaka)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 新里美智子、鈴木啓子
２．発表標題 自死遺族支援を立ち上げた遺族の体験と求める支援
３．学会等名 日本質的心理学会第15回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	新里　美智子 (Shinzato Michiko) (20816756)	名桜大学・健康科学部・研究員 (28003)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鬼頭　和子 (Kito Kazuko) (90714759)	名桜大学・健康科学部・上級准教授 (28003)	
研究分担者	村上　満子 (Murakami Mitsuko) (50403663)	名桜大学・健康科学部・上級准教授 (28003)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関